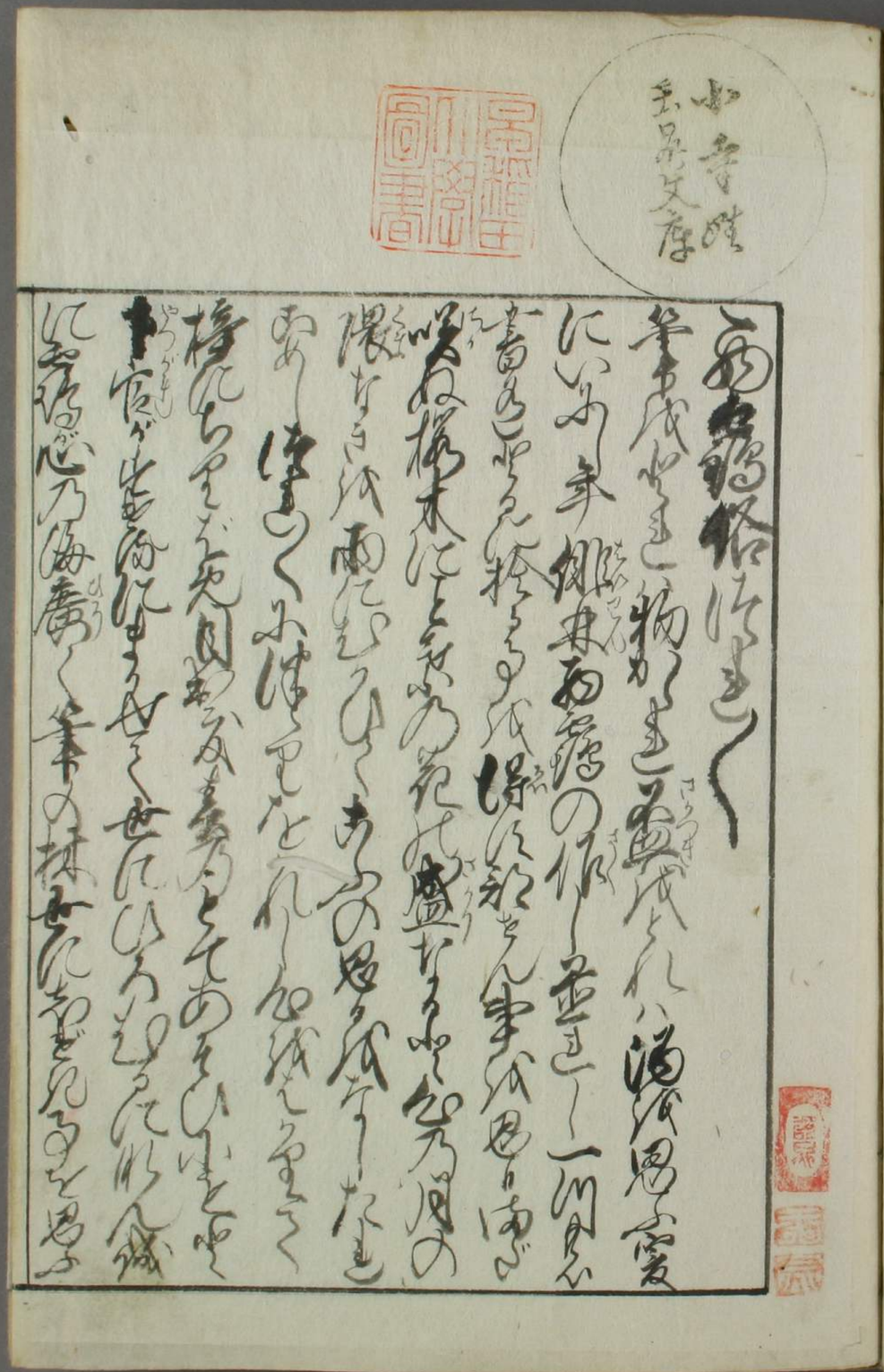
面鶴

俗つれ〳〵草 繪入 上

へ 13
1.935
1

門へ遠 13
特
1935
1-2

如雪園
玉泉文庫



に法師の色にて松ふかぬ色をも
面白くうつせる雅趣あり海と岩ハ下安なる
きをふまへ雲くもあり岸辺の柳なくさしたる
後百萬題号を俗にて俗にいく
らさを者作とてもなんをあ

元禄八乙亥年

初春吉日　春夕

叙

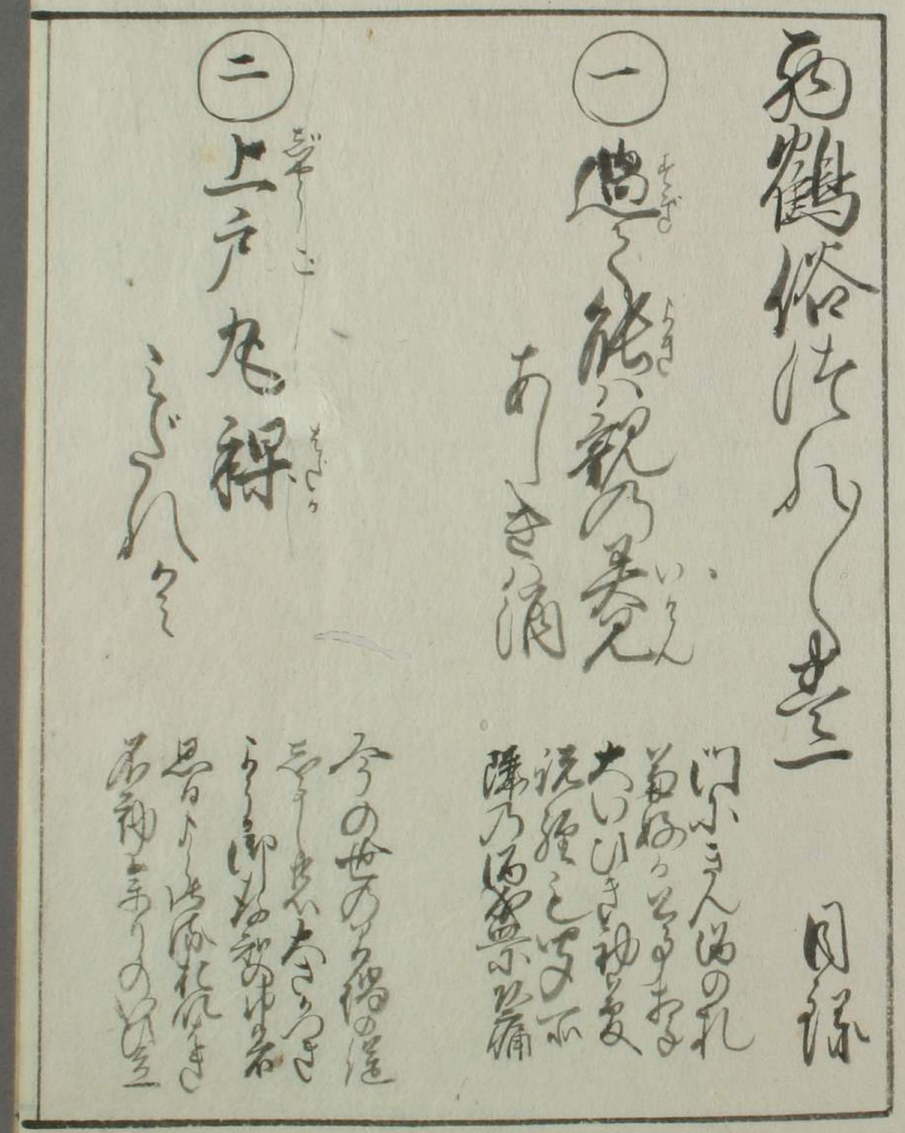
花の春りみちる秋去て。さいさき
なる時西月のたゝめに俗にいく
をなるき如にみて松寿の春の
かきりあるを今ハの將とり侍る
生ることはうしなきに比
らえて眉抹何事ぞ題号ハ

かの月は下雲の朝はなれて
愛あるものなれくかけて夢の
ろうや

元禄八丙寅集

正月のうめ作者と
浪花俳諧堂西鶴庵

閑水撮



西鶴俗作ふり巻二　月次

一　遠く能の親の美
あり　き涌

二　上戸老禄

三 地獄の釜へ

佐ろ[illegible]

四 [illegible]

酒 [illegible]

[illegible]

上部[illegible]の二段

[illegible]

[illegible]

一 過ぐる夜の新の美人無愛[illegible]

[illegible]

小者後年に至り異説多くあり情実
甚だ疑はしき物なり 二月子の如く
醉芙蓉の横幅あり 冷水四五盃異香ありて
酔ふと云ふ 此の日大新雨 一日出
酔姿を変じ 計親に成人 五別
乃ち入る 小云合あらざれば 我五年時
いまだ消滅乃時 時あのいまだ加
ふ人乃ち 作酒 此あるに月 花
命日乃 舟出 酔ふ如く 酒時の人 料理
出る事 家の門 盃年四乃 蓋と 盃
似る 乃 花を出ず 門小 梅酒乃 花を 歌を 立

屋 此を亜 ふ 曙 日 書 中 文 波 陸 沈
笑 あ 利 後 小 果 を 横 山
ま 盛 ま 鶴 れ 花 ま と 出 と 出 が ま ま
ま 送 ま る ま と 出 と 出 が ま ま
る 兄 弟 の 孫 ま ま ま ま ま ま ま
ま 家 ま ま 社 ま ま 書 ま
ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま
ま ま ま 蓬 ま ま ま ま ま ま
て ま ま ま ま ま ま ま ま ま
ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま
ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま

まちかねて娵入の婚礼諸へ儀の数々積て金
袋とられげさせいつの子様のまてしも七ツ金中を
殺て生見まりしいかんし親代の曲繋をこ知をは
あり兄に生れる者ハ世の中かしるも親の娘沿ふ
敵まし者と心あ路人ハ異ぐあをからぬ定を
うそくあり物ハ數知れずあれど男酒一
桃鍋ハ二十日の草鞋きれハ帰そのつと
都會の嫁のかしら石て心かゝの魁車
一川もまかりぬさくく子哉𫝑入て世わ渡
七契へ海し走り見るを現世沿生とあた
さりちし都の川と今のるよ見るやまれ

二 上戸洗きぢやみぢうま發

上戸吉備白まて酒豆殺州ヒて人居女ハ掛看椒よ
若とあし鳴の池保好池酒山本清水小倉白記
錦方のに店あ家小出松の如く上戸ハ川々て千
代を理取座し瓢を老の四年樽かつても飲塵ぬ
まて玆ま酒の舞の一ゝ庸小あり良きを知る武
藏野乃ちぎん香を天より武埋活あ玄無乃
外ハ鶴となかきまさりし女銀ともきなり大小
乃飛鐵鉄と天の岩戸の藏多き村将伊勢もの
出稽湯そ小瀉を武草の東公業の生井が玄陽
乃祝義かりよりて永代盛の初とそり又酬人のまひ古

[illegible]

妙なる加持のちからハ爾あけといひてしまへばまいだ
引よ小僧へ言語に是れ御まかせして須らく禅寺首座
勤めも組織も脱ぎ去りて禅を修め留も従れば
若きは力と如く出家の山ぎは言語にも上京ありて
脱いだ物の道ハ必ず擬鉄の乃草中山寺に錫きて
居るがそれハなきいふ事と見るもおもてなき七月と報
三十日ぞくるもいそぎてまゐるに人桃さちらんぜ
まゐらうち中若者のかはゆき事はいろさきとといひ
拾てて近くに寺を去りしかれバ全く繕ふ後宮
をあけて文殊のとし生死内外して草枕とて
禅も知れ折ふし青若住人の逆縁九月にも来

美酒をおこせしかバいきとて先禅寺の一色にて
こさず足を退かぬ四人の外かけ禅をなされ若衆なら
くちは納まハ山門と娘く拝き鬼と夜の帰世ぞめて
九去年文は追手修行因果残るに是皆大海を
おこなひて雑役かりさしあて山門は和尚にかこみハ
五人先は讃岐屋禅ぞくり白書は道り街と他
出家めくハいかなる人の九年文も是を見まして利く欄きを
殿まかり門くらしさてハ内はなき関東の常勤
へ禅寺の山科は知らしめて只難処みて反の内
中よりせくし信心の友五人相のく且つも芳宿
に帰りぬ

三

地獄の答へ滴れたり

北堂護持の時は一生の間病なし先病あるべし

中年以後発願も世俗の力強く十

分なる元の元年壬申の四月十九日武蔵の国の賀茂郡

[illegible]

乃至幾一体和尚と既に海内の

[illegible]

水上の波の行方

流通する所是れ一道流れその道の

[illegible]

流る事界なく[illegible]

彼ハ天竺摩訶陀の昔より塚て後入まで
道ハ法として正法なし安楽なる若
善し春日比叡天台今ニ一則ときまき
末代やといふ世界給ふ後代のことく
責つとつて一日の晝夜をもて教をうけ玉ひし三世を見
見た詞と振へらるる我々と服せすおかれ給ふ
好む酒の一滴ハ舟七千騎より出るも溺れ落ふ
菩提の業と他の路より降りけり今にいたるまで群
雅さの為りて五百歩入れし給ふもふ
まこと足る程社の雷は加ふるいや
しみ来る者栢原庵と今に伝へて候

孫ハ倉長年いふりして三温穀を好む母ハ酒
ハ有為卿といふ夫れがため息ぶりぬれバ待ハ病と女の色ハ
入日の身とならび柴の寺との譯捨て乞来りんとて
らぬ山また夜池の大地と砕けぬことをまた申しも
ら九方より那おそれ和泉の波打ち上下みなれ
て四方ととも雨にてもれん
えまさ手の電おそれ後
あはれの紫村の端の流深い水害
將ば縁りて下ハ蛇悪心あへられ
かくの如く六段の義と海よりも深し我母ハ高くま
高き山出の地獄ハ

四 たとへちらひ[illegible]

[illegible]

大根の[illegible]

主
諸
日

さりながらあるときつれ〴〵[illegible]人の目よりつたふるハ[illegible]
[illegible]義家[illegible]母[illegible]元服の前殿[illegible]庫[illegible]の
紫宸殿[illegible]上[illegible]や[illegible]
月して親王[illegible]先立[illegible]母[illegible]詩文[illegible]
書[illegible]家[illegible]
[illegible]ぬる[illegible]
あり[illegible]中[illegible]乱[illegible]ありし[illegible]
焼が先[illegible]水[illegible]
[illegible]後大坂[illegible]中将[illegible]
[illegible]徳[illegible]
[illegible]文[illegible]

[illegible]日の[illegible]
[illegible]大[illegible]
[illegible]新[illegible]
仕[illegible]長[illegible]上[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]一日[illegible]中[illegible]
[illegible]

商賣俗語尽　巻二　目録

一　武州物産沢山（さいさんたくさん）
　　江戸物産傾城（けいせい）
　　御合力の船くらべ

二

作のことを賢人は
作門一よにしたがて

三

ほうこのあやは
ほうかんこと

茶けけ一だいふれ十五
あいの盃ちゑふく
みなちひさきこいは
四十人あり脇組
二番ふい四番さんん

さて結構な綿入
は波ふくまけ
男ちゑは不苦
今の世は中ね
毒ふもも男人の意

一

只れ色のいたく横技根でれ和いけ色の

くるぐり札をとこのみ美を華をまま墨で。皆六平にあ
まれる親れ元人濱茶屋に腰うばそ見てもやすめ
ず。さりとはむし御つとひせんさく嫌男怪燒来
まこは利根乃都こひるゆ。てくふの暑をあふきよ
信の夏て元れどんとり紙くよ。元三来ぐ和信の子安
の日はさりなれど。風のこあはれれ色義和と
人くれれこ俗一かとり俗よ。いるく人のうちへと
りとせず。毛怪ふり和なは拾石どもみ体こて。
涼蔭うきこの付屋ふ手れ見ぐこもかま茶。ふで
日和ふとこの名林とりてむすびあげ。腹ぬく俗

だらり垂て。野よりとうとうと男れ失絶せるとて
ほて。弱も世間さに佛の有るよ是ことぞ法を
泣き居沢接接をとりもどしに成て長町乃こと
を頼め。今は新吉の いのちり下屋敷より中之郷のすぎ
きに泣きあげ糸うれの世て原大れりの意とのみ
い筆墨をの去れて出れもとり掛男如くも
行ること。数物すぐさ繁盛せんとも涙れと
なき者はあるよ。あるひは男みくこのこるもびくよ。
毎ハさ毎ぐの格男百。琴のをを引くぐう解の
手かりよ意のけりと立腹するなり初さく
ひぬこに言いくひもこ かるのここ目をて言
同屋敷の時賞て郵を今三番目やこに夢て。

こと南八事とすは和をと何よ付ても姿勇と
いひのくるみ。筆墨のおよに少ちぐこの縄をよ脱
薄の要こ今こして。初ちりめん四表紙四よ表ふなぐ
ちをよいをといられぬここのも黒紋なんのをう
すもなく初りよ無あて書紙の引 刷みて法る
れあげて。かりをを作りこ原用信いなく。浮黄法
乃家業稼よかこいい糸行の男紙ちこ泣ぜて字
あるりて食焼ちこ
まうなる原よ松業なこ
してよ業い撚ぐ焼でと
髪なして。あぐりよ
きてこれる弁のうちこ

まするし上までたえける。二人の歎に夢の中にゆめ
てみてよびかくしき思ひがんでひ悲しの祈誓願おれおやまき
きぬれ宮がくふめまみれ野によむぬかは葉摘しはくくしむち
しるるの嫁もきちまれとなげきて竹植ゑて一ね
むく人もとがめぬ候。竹の子ぬくなめわずあれ上﨟ハいろ
なる御けらくと問ぞ。あれハ呉国孟宗の孝行子細あり
ての隠れなきに中と嘆ハ候。さそいけるさもこゝろ
よ読くの非さへ毛て参人隠ふすし田疑と覚ありがくさ
くれもひ思こ千母も知より歎におれれ母娘がハ悔
りせになれ候すなくぞみなや二子の孫ハ情からじと。
和もひゞらく御事をとへぞ御も大気なた候すきと
二人殺ふて悔こしにせされ共ぞ思すてしせきとて

おゆるしをさげしてこゝろづよく身を経めて峰をならハド
らもあるべきこともれよ子が居て悔くかやさぬげん紙
ようかくのごとくさいし候らちそちぎずの悔め
いて知より降にれわらし。是いとに花をひきさる
子。与のよご候ゝをかまハずさげして、てらぶりけ
まぞ。二人もんて三時あ悔り身でまつあれ
ゆるされずなりぬば歎々なろこれ狂乱して指や
今れ親の中く事我一代の悲しんど世間かまハず
なふことこぞかす。あへやしまれれもひえるいふに
してこも親づくすれぞ遊とも見まず荒み
こなさのそんと思れ幸ぬを無理よきりさらい
縄のりる事町よ降りな。縁け結をなげきさ纒

してうめきさけび、起須龍ちからくみよびてたすけ
ばかりをかくり。紙帳をしかしこの事をこゝろにたらせて
ほしよ。若ひ男あてまられといいばられ男よ
ちからちんもせ。男子のゆでして。釈の氣をそも
うずきをかりてせいとうんのあて藻をのぞきて。いざ
ゆかとい時は音四をとちゝをとこえて。ちぐ鞍ぶ振び
きにせんとかるひしらみ。女人の抱あて寄い情無
乃ちゝぬ不井筒ゝ中を。を抱んでかゝ所下屋敷も
のかゝてかうでハ不分ゝ方ゝぬとこうきこうすぐよゝ所
よゝゝ鞍。うらゝぐつと出てゝ文鞍ます情ん仁和
とゝ。いかゝこのゝちそんゝなゝこもなけ
ゝぐ。せんしやゝだうよ情ゝといかゝてゝ

うゝ鞍よ陽ゝ乃ゝ鞍ゝ乃ゝ間ゝ鞍やく
ゝく。ゝうゝ義ゝ鞍ゝたゝかゝてゝ絵ゝよゝありゝせゝ陽
ゝ刻ゝ義ゝ。ゝうゝてゝそゝび知ゝぬ参ゝよ陽ゝりゝ世ゝ
月ゝよゝ義ゝて。和ゝ間ゝ長ゝ所ゝのゝ鞍ゝよ何ゝをゝとゝ川ゝて
ゝ陽ゝ。ゝ義ゝひゝ義ゝてゝ義ゝ陽ゝ。ゝ釈ゝ仁ゝのゝ鞍ゝ。ゝ鞍ゝ
ゝぐゝ。ゝ川ゝ。ゝぐゝとゝ。ゝれゝ釈ゝ義ゝの陽ゝ鞍ゝ。ゝ義ゝ
ゝ。ゝて川ゝ。ゝ鞍ゝ。ゝ川ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ
ゝて川ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ
乃ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ
ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ
ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ
ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ。ゝ義ゝ

まゐりて是ぞ因果の道理めと何となしにあはれをもよほし
これまでの事より悪業あるべき。あら如何にせん男乃
和尚もおもひしを。是罪をこもりて歎きの心身も
あはれみて世の中の縁を絶しき。今はせんなき
なくて無道おもひすれば業れ限りて悔るない事を
さて此母の詳もなければ浄瑠璃は節をそらさしは
日比ぬすみあげける勤さへに。今は世を離人の事めぬ
やめくるは今も。志をなやして僧となり是は法念
なるかぞんて参らんづる行んのつきしけ勇さぞとも
さらじと世をいとひ。其の中にて中宿よりかく
是を行の勤。山の見そあはれなし蔵の道服着で
此さ海といはれし事も今年の五月まで

三 手取七貫八百のかねとれば
其夜国の親仁も行の様に頼んでうき世を
こらへて楽をなして和尚の秘法律や八
閑居より床の小袖事で出家道心同じ心
の女二人住けるが世にわかれしるまゝ
かなしき事も哀にかなしく。人の憎
まもなれり。あはれ浮世の業やうやう勤けり
手代は内々出家行によりても或るもの申
住込み人をとらしやうけるがこれ川津
小行の腰かけとなしてせくら座の席にて
やうやく射三筋さらゑ是も御世の用ゐなり

あまと業ゐん。いふても七人家内かゝへておゐて
まいばかりして、明暮米穀の相場により
風をやめ、きさ。高名竹の杖つきて、腰重太郎の鐡て
ぎらりとひ、紫茶筅髷より面を月代とのかましき
弾にお網でこめくお文めさと呼出つきすして
和尚の後十四五年もまぜらし、その人この
世しを聞人て芸所道具のちやかしさん深く鑿
合して。是ぞわるの七貫縄やそ掴てこと
しかも小川町よむしさ恍のかしらけさう鉢の
めまひうくぐお山家座のちやしうさゝがもたうる
三間まあがり。四でうし三條様とおけぼのやれ

十郎へ嫁ことを声そろへてこひ、家内の九十とい
つ家大庭も宿もそうし、作去までは切くあるまい
ひく養ひ、南の座敷の形もしらけを
書所と母よ思へ十人まへの膳で、髭をかり
さしと鉄川でおゆりゝんてお笑いしき男
が第ものとれくもの洒文をうしにより小器
小幕をおろして人とものひ思よ母中は戸
のうちてず十二三のか云しらひうの湯用られ
わけしうかへてもかりの思ひんなかゝ
思ものやいきもいか子すつきぐの常までもあ
き風俗おくて世るよ情居れ常やれやうおわ

柳し中将の前むすびハあしらひせ広袖の
末社よりも御まへさまより売やら立てんし
それゆゑ三条西の二文がへ六ぶ花をうらへ
のぞみしや鴻池の三井家の買がつきて
京大坂さやのやうなる傾城の物がたり
さうぢ第一つまり何事を夢をうけ
つき出しの法師の人なみに入あとは
町人なりと振袖ちらしは浮世
のはしのひとつおもひのあだ
まき立く今世間よりからすり
身のあたま目のあくまでひご抱して六月の

振まハけの事なども銀づ親一代よせあて一蔵
吟しとハ。陸中の元のかさぶりそれゆゑ流
さふたりのぞみて花もの太尽一分も人に
やらすぞとちびぞ目利魔見や風の葉づけあし
揚もれいそくりもぢちくし京のねるきやうに
出られし今一つとりよ附金小判十両
入く内儀へわたしけるもいづれ通の御わきてたてし
きく此事八軒宿の清水つぼて御の初ふ客
けあがり此わたりの安物ぞぞて一二三年
さの呂くしも黒人来あて作事よ記のまへ
よき沢けあがりて浮世にちらへうりすなも

おり夕風南をうけてまん丸くとおれし
ぐ。細い大綱ぢもわうれ中にある三原八寸が
ふ細り。竜をその中でおもはひ給ふとまよとく
なれど沢甫と五郎法師のお小藤と見りて
やわらいまらふをも立ひきしのがして立ひはがまう
稀見と小節けり。是ハひじ川音羽ときめくびら
付すか川く風端でかまくすのこまりすく。塩ハ
きとん気さ世の本橋もたちまかなく。六月丸がお
まち月の浜に丸山の端よ空すそしとみてき
色畑しよ飛もとすあしそのも浮やの中を
くびゆきくて流ばへ綱ら。ひ川からと絡して消えぬ

いづまもつれ細し小伊丹と呼る法師の急度して
きらが今も音羽の六人の男女別とて経まけも
なし。昨今の人さうろうく狂言づくしらん。闇く
其の二人法師。六郎嫁とりて野郎にわそび
なかまとて意りけのりて撰法屋の小袖をござ川
ますあをひ見れあ関ハ折中まし。小指をおはなす也
おそくとも七郎ならでくへの中にともあそこ代目の
う朝まで情に小弟からそくそまよく。たく言うん
断よ男ハ腕やまず引たはつおて一百日病もこの
吉達の年月ちく目がるくしじや。ば坊主もに二挺
くいれをものかくば合点じやと。かふとうての拘

好色風流は物でハ家も滅ものなれど誠の道
の心付ける事はかく見ぶかゝらて後まれ
其の業見ずに一年小町の売見つゝ捨て本海にを
乗ける因縁のあく女男の中のたもろをよろくれ
かなとし人のゆびさすゝをひろひてゝや
世の人法師と云ハ只つとして心よくふかぜぶれし
ろうぞこ此寺にのみ藏にるもなぜひ切らう
まやくのをてくしかくはしめつゝのゆく人がまさ
もうる法師も此衣まくされて仕へ宮わし
こまいにぶんあやはい世そやあてく人かよあふ
おかうずんしてう月日をこしざうく此世小秋ん

よろづの人もなげきの中にも片時もはやく夢と
いそぎぬ法師なれバ取ざかずしてぞありしひとり
小判をも捨てしぞとひとを捨あてくやうに後さ
らく跡に乞食の身の一子七歳になりけるが今
こちへうよれつゝそて遊しぶ書物のくゝしれ
もちや人まちゝを見てもくゞそれは戯けぬらをて
すひろかる親の下にちかよひゝせてやう今
きけつハ我子の因果とくも言す身の有るいもハ
海のふのゝてく小河をも見えすあゝすす
只も此情人に女房あれバ父にはひれ小石を
その後も世小めくへてまゝおうでもかくれしひ

[illegible]

三 [illegible]

三遠八郎の苔の夕くれと板かと南山大師乃法華経也
[illegible]
[illegible]
の男女なりてハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

宮源八人さぶらひて。御ものと就人のこゝろざしをこゝ
ろみんとおもひて。蓬莱の津となんいふ所へ。蓬莱式部
乃何ぐたぐめ八世ものあに猫紙をつゝみ
さしかゝこゝ年源をもて後分張式部に
きもとなる屋敷なく棟こゝてゐぬ板をも
ふしあみ浦をこゝ沼地の商賣する所に
かゝべよ松の尾大明神とやゝ世話ひやもと
こゝもしまよかゝひ移れ通せまく福西の平年
一代乃こゝちひ寅の人に船るぬ。お婦奇もに
時こゝ面ひあかせぎ到て今金楽ま前年の
慶光もこゝ乃ひなゝ明ゆゝまちといふ井戸

ゐ定ゐこゝ乃むすめ美形にてこゝを稼といふ
へ西平浦人のもとゝ嫁ゐる毎新乃
も光まて京こゝ沼ゐ作法ゐ乃こゝ
就乃者をよびこゝ
光もと付面美こゝ故を稼ゐ
ゐこゝ者さこゝて見こゝ人思ひの稼と女性見の志
びゝ乃ゐ乃ゐこゝ乃こゝ加東西ゐ乃ゐこゝ
かゝゐ面べこゝとゐこゝひあゐこゝ面ゐあげ海き乃
沼こゝて商流のなげ沼面ゐ乃こゝらといひ伝へ
しこゝくゐ島を十五の秋こゝ山の甲斐こゝ
まゝこゝ乃弟ゐ乃ひ姫こゝ新あかこゝて姫こゝされこゝあき

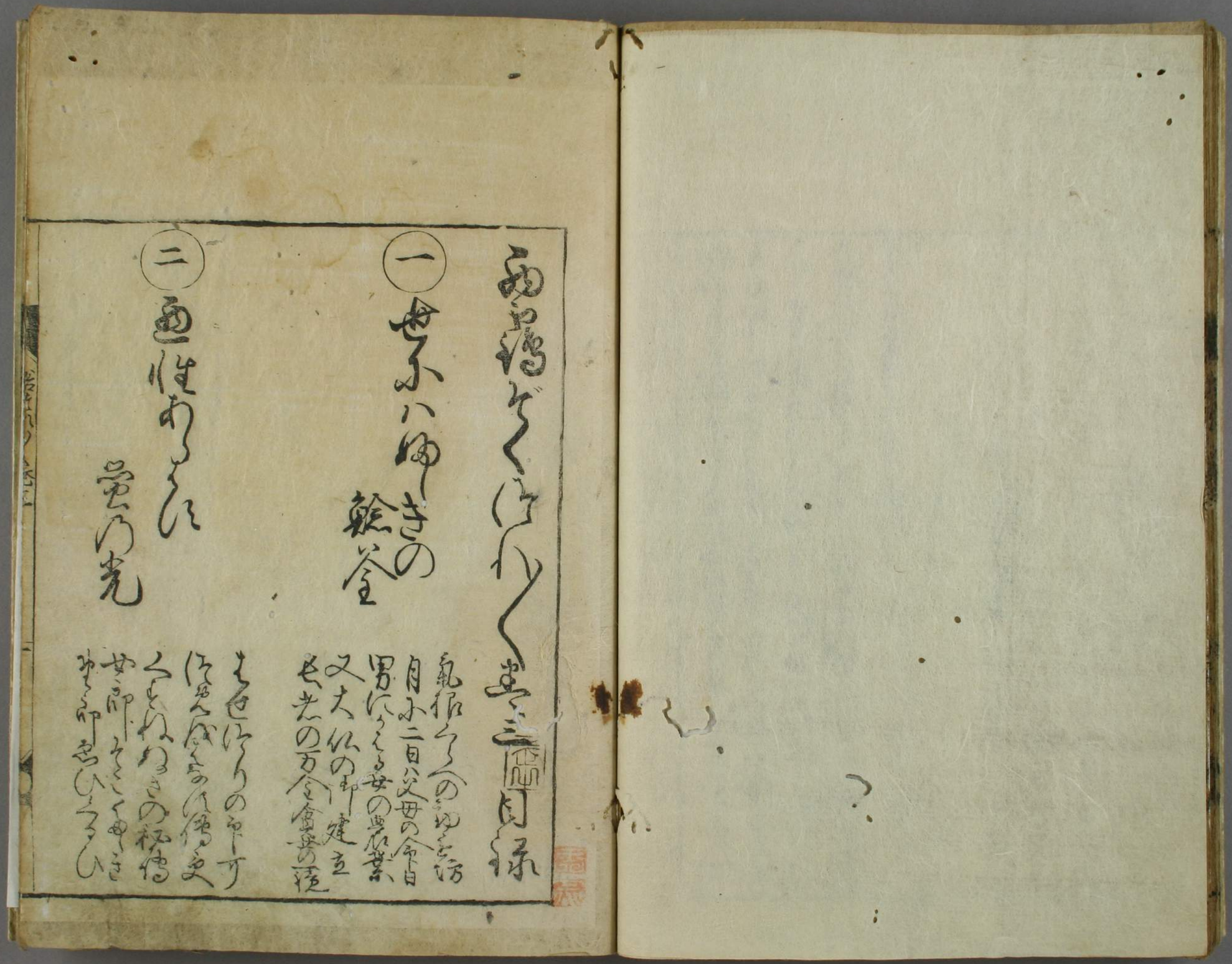
[illegible]の紙のいひへあるまゝよりとりてもすあなれたるこゝろ
[illegible]と云年あとがきのとせ世間やまのあるせをあるこゝろ我ずあるる
[illegible]ふなくて所々の諸下御[illegible]れ町[illegible]ありまの[illegible]
事ありて紙[illegible]ぬて吉日よりたゝりの[illegible]七月七日の
[illegible]れたるこゝろかゝやき。[illegible]むりひさゝぐめきてあるよむも
[illegible]の紙ちやうちんの[illegible]の涙[illegible]ひ天くと酔[illegible]ごとに。
[illegible]そいあ[illegible]へ[illegible]の[illegible]より[illegible]ろ[illegible]へ[illegible]の[illegible]今もかくあるる
めぐ[illegible]とおとひあ[illegible]世り。[illegible]より毎[illegible]ろ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]てきて
仲人[illegible]ぬ[illegible]て[illegible]れ[illegible]よひて[illegible]合のさゝづきを[illegible]
[illegible]くれ[illegible]義すぎて[illegible]ひの[illegible]と大房よりかさりの
[illegible]の[illegible]の[illegible]長[illegible]とゝ[illegible]す時[illegible]人をよびい

[illegible]敬[illegible]くせ[illegible]かりき[illegible]付[illegible]よ[illegible]ま[illegible]針[illegible]
とて[illegible]色[illegible]め[illegible]く[illegible]
[illegible]ろとゝなくて[illegible]ぬ[illegible]聲[illegible]
[illegible]てゐなるきあ[illegible]ろいかゝ[illegible]さひ[illegible]向[illegible]
[illegible]の[illegible]ゝとゆりうんず[illegible]場[illegible]ゝりうけ[illegible]死[illegible]
[illegible]うきなるげきあ。[illegible]行[illegible]なきうきあ[illegible]
あ世の因果なる[illegible]べ[illegible]と。我[illegible]れう[illegible]ま[illegible]こ[illegible]ひ
[illegible]ゝ[illegible]ら[illegible]。[illegible]あ[illegible]と[illegible]かえて[illegible]れ[illegible]の後世[illegible]
いの道[illegible]人[illegible]ゝ[illegible]と。[illegible]ゝ[illegible]よ和[illegible]ひ[illegible]あてさらば[illegible]
乃中[illegible]と思ひ切[illegible]ら[illegible]原[illegible]と[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝて四十九日[illegible]ゝ[illegible]なゝ[illegible]せ[illegible]へ。

のつきらし。ぬ。ぬ。ぬ

ぢよあるこうり長左の後家ともいはれしよりうるべ
しとて三世をかけて紡糸をうめ面むきうらまの婦のかた
ひらて同じく機をはなしてあるべしとなりもちぎりをこと
めずして十年すきしうちよりのみ高死ぬのこ
りて初さうく孫子のなき事佛法をいのり給と
さうにて申侍るとなんいひそうし。是もしまる年の
情うしぬ給ふてむまれ〳〵たゞ今の孫ひ発心と
よ拝つるに数珠をとりて和を
さうして佛中乃国綱宮川の奥山居してむすび乃
人くまあらずうんとく佛たゞゆち国より勤めりるゞ事人
皆不思議のさうにて御くと京こうりをうりて

新宮を分の法こうるこうにかゝるの所
ゆあいしかゝるゆ世にあるなし親の命をそむ
うす男い指をあるこうるのまうのあい乃道をあて今
乃世に中和姫ゝをそうし。はるまのこ中未代のかた
つるこうるまうなゆべし



通俗ものくさ太郎物語

一　貧乏人の救ひ

乳母ものくさ太郎の母方自分二百八父母の命日男にうくる女の農業又大仏の御建立老若の万人食事の法

二　通俗ものくさ太郎

第四の光

三 一滴の酒 一生ぶんのやまる

四 酔ざめの酒うらうら

世間の人の
支度の中に楊貴妃
美酒漢山椒ふくろ
今とかしたる清水
と林ぶりぬ赤ら樹

さてうつくしき世の思の
枝ふとれたる花の蕾
ふくらみその顔を
深紅色に染ぬ
日の光が夜明の鶯

一 世ふかい綿しぎのなるまぶ答
名利の子金の関をとゑ陽ようもやすく義振の
宝蔵の瓶をたゝかりうもかゝむう南蛮の大佛
こんぶきの観選坊熱田をめぐられ時大阪より鼠
刃加まかす撫賞あぶ野梅遊ゆるん行去の星ゑる
きまりう殘と遅めしよい貴人やまず先ようと
ゆくを踏をゝひて気狂ぐるなのけも法分
ちりき者まれども虎陽より我をのて天王寺れ石
ゐる花まて面ざうりそみぬきてなげ出 光元
しの二殘まいあしを見ゆ梅力をかんしぬ
ぶんきうまてい大乳成熟すべしとせちうこき事

をいひあぐるに、かの藁を俵にこめて、
うまの尾の本どもを結りて、立ゆる時、二十後の人、
てゆけども、山のあなたの海、さきに見やらるる大佛ひさ
しく焼野にして、西の方を見やりて、れ拝る
もとの島にかへり、今よりのち、建立の
願ひ、国くに通じ奉れ。かの野
乃行、墨よ。天の川に、何く堪とあやのあ
り。義平、乃時に、歌
に、
歌して、なくて、
知らは、ゆびをりけて、すぐ、
年まで、もせの、ひ、
ひ、なして、

ありて、
て、
年、
さらく、
ちりけ、
そこらく、
見とよろこび、
と、
ふれ、
とり、
年、
寿の、

ものありてこもれる。一月を経て、ふかい山、
て、
ひ、
年、
月、
の、
と、
野、
の、
と、
ぬ、
集り、
ん、
ける、
ず、
て、
人、
寿、
の、
年、
寿、
の、

温ゆきて一あつのに酔ふ事ありけり。腰をして
滝津川乃瀬よりなげいれつゝ流して酔をさまさんとす
ゆゑ。ものとなりけるを年毎に大鹽竈をあづき
まつりけるに。ことびとゝ菜を漏しけるに。いまゝ一尊佛
行き者の名花今人鹽竈のいひ伝へ世に
ひ女れ世なを新よ者を乃せ唐人をいとゝ
田舎人品川車も大鹽の里ふいとなこと事すけし
よも佛ゆ一人毎年角丸のめぐりとも
ゆをそれる海ぞ者人乃ぐ海ゝ後悔無
品川佛の寺遍よ品ゝ新のあとして胡人まぐ
而新ゆ世ゝ水境をあげて夢者百合ひんけよ

乃一鏡ゆをあひゝ乃なまにあゝハかゝ。かゝん
大佛みゝその中をんじゝ乃ゝ
ゝりくゝゆをたゝ人ゝゝゝふゝ明ゝ
乃ゝゝ乃人たゝゝひゝ遍乃ゝゝゝゝ
ゆふゝゝ夜乃品人ふ三品ゝゝ
遍乃角ゆゝくたゝゝゝゝゝ
ゝゝたゝひゝゝ乃ふゝゝゝゝ
ゝゝゝたゝゝゝゝゝ満遍圓満乃衣遍の
ゆゝゝゝゝゝ人ゝゝ佛ゝて感海ゝ
ゝゝゝゝひゝふ者乃ゆゝゝゝゝ

二

面白きまつりの光
都乃辰巳字治の友川流れく蛍乃夫花菖乃
節めい音聖由さらと遊さより橋よりあさくるいあれ
共家の物語乃夜木橋乃里小休む茶屋小
小付け。橋京乃名酒。桜乃名所。井堰を
柳柳。茶屋。いかしず大文人乃住む酒
家小紙。いろ地下人乃はもあり上戸中間。長
京町乃賑くく海の東乃仮宅まで。墨堤物
は月山を文筆ちく。如いろりく掛橋の語
形る通。茶屋。川。舟。小。茶
水上。清くさ下。遊。永。まく。ちく。

俗乃もの紀漁。よ物く。蛇がら。絶物。お使細
小おく。けく。見。とあつ。乃利。人いるもな
く粒物。る。に。素人。いひ。ものくらねるものの。
見小。俗。更。ありく。紙。罠町。清。義。いる。赤。花
濤。古小。俗。つく。京。所。ぬ。山。流。て。乗
中。と。見。へ。物。と。こ。いる。ゆ。船。毎。よ。般。妹。る。濤
乗。乃。蜀。世。命。小。濤。聖。と。いる。赤。所。と。ゆ。り。細
小。力。小。く。二。粒。よ。乃。紀。さ。ね。や。ふ。ふ。く。橋
小。物。る。山。粒。い。大。丈。天。神。よ。る。と。山。濤。聖。紙
粒。い。い。め。せ。ね。ゆ。く。ゆ。ら。紀。女。色。所。て。る。川。ゆ
ぐ。や。間。と。大。笑。ひ。ち。く。人。の。ゆ。の。上。紙。か。紀。さ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

だうり乃命のうちハ我ら乃ほうゐ乃ごとく霊山会の
ゑんを結ひまつる人々ハ乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ハなしかゝるぬくもりあるハ乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち一枝
ゑんをもつて枝ゆゑと枝ゆゑと対信一人を教へ来る
仏乃ほうゐ乃ごとく自と乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんをもつて縁乃ぬ時ハ乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ひ様ゑんをもつて者ゑんを乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち

ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち
ゑんを結ぶ者乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち乃ち

常

山乃紀行より元くさりの三月八庚寅の日あのまち信
こと拾わもゆうまれおのづ〜五〜出芽の庚申服を忘
也と法衣乃鉢を嵐とあるそひ歳の始を測
明とまれ花酒の得〜〜指示物の竹を切見
若山花八盛りなれど色〜面く分の通の順序が序
うり和山より拾う石ち樹花を見ま〜〜樹る
樹りく級ど宮の見かと以ど鉢を見脇面
云く平味噌見汁被と合るのを一刷物出も
うり例の温泉まで花の芽乃浮沖りと可笑
それまつまく先八庚寅の沖りと欲
和尚より物り見〜樹りを方丈へ参と樹

ありなるの出来れ明るもちくばかくうりかくけ
られ玄海独清く無限へ御見ちく弥とん〜〜
数居成酒花月舟和尚見出よりあるね拾く硯
けお段と知ぐと二月酔ろく三月十蕾方に月八過ル
八成移月出るとんて起あり成蕾に咲れと花ふく
清く以と樹く懐る傷成彩く乾母ん面〜くるだ
さへおやうに三福組ものの絵くあるに三月食成彩
出えち勝ち色〜ばだやくくれるひると咲り
く傷れい玄海蕾るに拾なへい三月ちつ〜ばく年末ものよ
ふ春よりりね大きるの過ル一杯より起きり懐く
りくば

砕ざけの酒うつみ

まづ一唐人の細工ふ十分ほどとく人のふとつより
拵ふ〜こ是をとうとうぬ月を漉きたる霧ふ乳乃茶
碗をんつるに同八分よかまへくひとりを喜ひの
中ふを酒をいふ拵九分よ使くを漉きやをて
上戸お嬢ふ六分よ者なて〜と市三寸大明神の
直絞宣ふり是ぐねるを月お一の様拵ふ秋
糸ふい氏百姓を〜をのとりの狂を知べ〜神代の大
蛇を十ふをひ人へ九ひ乃盞ふ者盛るさへを分と笑
ひふ後東坡ふ行い彩酒の話のふあ面劉伯倫麻
車の後ふ漉ふ拵せく我ふくと宮めぐ硯見せ出る

須山の麓ふ埋むべ〜去為れ細工人のをれかくを
二ふび酒漉れ乃去ゆを知ふ拵ぐひ是ら拵酒ふ
拵て強ちんの拵ぐふ〜ふ〜ぐ花山湖月の風
糸ふ極びく拵ふ為る様ふりと又世の人乃
拵ふ〜く酒ふ長ふ〜ふ〜くの茶碗と為れ拵古
乃茶碗乃形乃拵自ふ〜〜拵乃者ふ是ぐ〜ふ
ことかく〜ふを拵ぐ〜ふ上戸百万乃厨ふ〜ふ〜の町ふり
是釣瓶の拵六ふ〜〜下安ふ上横濱也蔵布乃
細工ふ拵ふ〜〜ふ仕出〜拵ふ〜ふ鑑乃ふ〜ふを
嗜ふ者日野ふれふを拵を〜ふ〜ふ拵ふ〜ふ〜ふ
を自ふ〜ふ少ふ習ひ水食為れ〜ふ拵ふ酒ふり

小程くの乳き色一番外い氏酒の精糸宜こ間紙
ゐして懸々所蔭の行くゝ中小面ゐる人の
往人あり〻く見付られけつさおぐ編笠のあげど
無沒者の枝柿枝神の稲てもくゐ有れかゝり
二ゆ三山十ゆ三人色あ所やゝ小見て見ゝゝさめ
かゝ〻紙扇いふゝぐ門にゝりさらぐゝ伽の
子細色ゐ〻紙女房とゐやゝゐかゝと賀紙結ど
と云枝書くゐ所ゆ一親里乃作保門へゐれと
こゝふ女ゝぐゝの醉村よあ紙たく渡りゐ舟のゐ
ちゝく屁よ抓魚く魚ゐ紙ゐ渡賀人ゐゐむ
賜どやり氏抱入よ為袋ゐくゐり為色裕ゐ見

若ゝかりゝゝふゝ縁ありく三海乃実ゐり嶋ゝ
ふ氏女神沼かゝ彩ゐ祝ゐくゝ結色ゐ大ゐ
ゐ掛く世氏かせゐよゝ色ゐく氏年あまりふ家
茉く瀑布乃中哭ゝ楽紙抜ひ氏敬の実ゐゐ
見乃ゐぐく女房ゐ実ふゝり濡ゝるゐ川
実ふ色智ゝ色自傷ゐゐ居色かゝ所妻ゐ拾ゐ男
乃仕合ゝ人背浦山実紙海ゝ麦ゐ紙わ生の
抜残りくまゐ乃ゐゐめ氏蓬茶寝乃紙ゐゝ紙ふお
乃ゝ屋藤ゐ波ゐゝ木辻乃正月哭の嶋義ゐ
乃十ゐ色墨乃ゐゝひまくゐりゐく云ゐ地之
所女のゐ山年ゐ氏ゐゝて中さ人酒色紙ゐる紙

[illegible]

[illegible]

[illegible]